

日蓮大聖人御書全集

ずいそうごしよ

瑞相御書

新版
1550
ゝ
1553

ずいそうごしよ

瑞相御書

けんじがんねん

さい

しじようきんご

建治元年('75)

54歳

(四条金吾)

そ てんぺん しゆにん

驚

ちよう しよにん

夫れ、天変は衆人をおどろかし、地天は諸人をうごかす。

ほとけ ほけきよう 説

たも とき ごずいろくずい 現

たも

仏、法華経をとかんとし給う時、五瑞六瑞をげんじ給う。

なか じどうずい もう

だいちろくしゆ しんどう ろくしゆ もう

その中に地動瑞と申すは、大地六種に震動す。六種と申す

てんだいだいし もんぐ さん しゃく い とうゆさいもつ

は、天台大師、文句の三に釈して云わく「東涌西没とは、

とうほう あお かん つかさど かん まなこ つかさど さいほう しろ はい

東方は青、肝を主る。肝は眼を主る。西方は白、肺を

つかさど はい び つかさど げんこん くどくしよう びこん

主る。肺は鼻を主る。これ眼根の功德生じて鼻根の

ぼんのうたが めつ あらわ びこん くどくしよう

煩惱互いに滅することを表すなり。鼻根の功德生ぜば、

まなこ なか ぼんのうたが めつ よかた ゆもつ よこん しょうめつ

眼の中の煩惱互いに滅す。余方の涌没して余根の生滅を

あらわ うんぬん みようらくだいし う い

表すことも、また」云々。妙楽大師、これを承けて云わ

こん あらわ い まなこ はな どうざい あらわ じ

く「根を表すと言うは、眼・鼻はすでに東西を表す。耳・

ぜつ り なんぼく たい ちゅうおう こころ しほう み

舌は理として南北に対す。中央は心なり。四方は身なり。

しん しこん ぐ こころ し えん ゆえ こころ

身に四根を具す。心はあまねく四を縁ず。故に、心をも

しん たい ゆもつ うんぬん

って身に対して涌没となす」云々。

そ じつぼう えほう しゅじょう しょうほう えほう かげ

夫れ、十方は依報なり、衆生は正報なり。依報は影の

しょうほう たい み かげ しょうほう

ごとし、正報は体のごとし。身なくば影なし、正報なく

えほう しょうほう えほう

ば依報なし。また正報をば依報をもつてこれをつくる。

げんこん

とうほう

した

なんぽう

はな

さいほう

眼根をば東方をもつてこれをつくる。舌は南方、鼻は西方、

みみ

ほつぽう

み

しほう

こころ

ちゅうおうとう

知

耳は北方、身は四方、心は中央等、これをもつてしんぬ

しゅじよう

ごこん

破

しほう

べし。かるがゆえに、衆生の五根やぶれんとせば、四方・

ちゅうおう

驚

こくど

験

中央おどろくべし。されば、国土やぶれんとするしるしに

やま 崩

そうもく 枯

こうが 尽

徴

ひと

は、まず山くずれ、草木かれ、江河つくるしるしあり。人の

まなこ

みみとうきよう

騷

てんぺん

ひと

こころ

動

ち

眼・耳等驚そうすれば天変あり、人の心をうごかせば地

どう

動ず。

きようぎよう

ろくしゅどう

いつさいきよう

そもそも、いずれの経々にか六種動これなき。一切経

ほとけ 説

たま

ほとけ

を仏とかせ給いしに、みなこれあり。しかれども、仏、

ほけきよう

説

たま

ろくしゆしんどう

しゆ

殊

法華經をとかせ給わんとて六種震動ありしかば、衆もこと

驚

みろくぼさつ

うたが

もんじゆしりぼさつ

答

におどろき、弥勒菩薩も疑い、文殊師利菩薩もこたえしは、

しよきよう

ずい

だい

ひき

うたが

だい

けつ

諸經よりも瑞も大に久しくありしかば、疑いも大に、決し

難

ゆえ

みようらくい

だいじようきよう

がたかりしなり。故に、妙楽云わく「いずれの大乗經に

しゆ

あつ

ひかり

はな

はな

ふ

じ

どう

か、衆を集め、光を放ち、花を雨らし、地を動ぜざらん。

だいぎ

しよう

とううんぬん

しやく

こころ

ただし、大疑を生ずることなし」等云々。この釈の心は、

きようぎよう

じよ

そうら

おお

無

いかなる經々にも序は候えども、これほど大いなるはな

てんだいだいいい

せにんおも

くもか

しとなり。されば、天台大師云わく「世人以えらく、蜘蛛掛

すなわ

よろこ

きた

かんじやくな

すなわ

こうじんいた

しよう

かれば則ち喜び来り、鵲鳴けば則ち行人至ると。小

するしあ だい ずいな ちか
すらな お徴有り。大い ずくんぞ 瑞無からん。近きをもつて

とお あらわ とううんぬん
遠きを表す」等云々。

そ いちだいしじゆうよねん あいだ だいずい げん ほけきよう

夫れ、一代四十余年が間なかりし大瑞を現じて、法華経

しやくもん 説 たま うえ ほんもん もう にぜん

の迹門をとかせ給いぬ。その上、本門と申すは、また爾前

きようぎよう ずい しやくもん たい おお だいずい

の経々の瑞に迹門を対するよりも大いなる大瑞なり。

だいほうとう じ 踊 出 じゆせんがいだいじ 並 い

大宝塔の地よりおどりいでし、地涌千界大地よりならび出

だいしんどう おおかせ たいかい ふ おおやま おおなみ

でし大震動は、大風の大海を吹けば大山のごとくなる大波

蘆 葉 しようせん 追 帆

のあしのはのごとくなる小船のおいほにつくがごとな

じよほん ずい みろく もんじゆ と ゆじゆつぽん

りしなり。されば、序品の瑞をば弥勒は文殊に問い、涌出品

だいずい　じし　ほとけ　と

みようらくしゃく

の大瑞をば慈氏は仏に問いたてまつる。これを妙樂釈し

い　しゃくじ　せんこん

もんじゆ　よ

ほんじ　ことわ

て云わく「迹事は浅近なれば、文殊に寄すべし。本地は裁

がた　ゆえ

ほとけ

たく

うんぬん

しゃくもん

ほとけ

り難し。故にただ仏のみに託す」云々。迹門のことは、仏

と　たま

もんじゆ

知

ほんもん

説き給わざりしかども、文殊ほぼこれをしれり。本門のこ

みようとかく

測

だいずい

ざいせ

とは妙徳すこしもはからず。この大瑞は在世のことにて

そうろう

候。

ほとけ　じんりきほん

じゆうじんりき

げん

仏、神力品にいたって十神力を現ず。これはまた、さ

にずい　似

じんりき

じよほん

ほうこう

とうほう

きの二瑞にはにるべくもなき神力なり。序品の放光は東方

まんはっせんど　じんりきほん

だいほうこう

じつぼうせかい

じよほん

じどう

万八千土、神力品の大放光は十方世界。序品の地動はただ

さんぜんかい　じんりきほん　だいちどう　しよぶつ　せかい　じみなろくしゆ　しんどう
三千界、神力品の大地動は、諸仏の世界、地皆六種に震動す。

よ　ずい　じんりきほん　だいずい　ほとけ
余の瑞もまたまたかくのごとし。この神力品の大瑞は、仏

めつ　ご　しやうぞうにせんねん　過　まつぼう　い　ほけきやう　かんやう
の滅後正像二千年すぎて、末法に入つて法華經の肝要の

広　たも　だいずい　きやうもん　い　ほとけめつど
ひろまらせ給うべき大瑞なり。經文に云わく「仏滅度し

のち　よ　きやう　たも　ゆえ　しよぶつ　みな
て後に、能くこの經を持たんをもつての故に、諸仏は皆

かんぎ　むりやう　じんりき　げん　とううんぬん　い
歡喜して、無量の神力を現じたもう」等云々。また云わく

あくせまつぼう　とき　とううんぬん
「惡世末法の時」等云々。

うたが　い　そ　ずい　きつきやう　いつとき
疑つて云わく、夫れ、瑞は吉凶につけて、あるいは一時

ふたとき　いちにちにち　いちねんにねん　しちねん
二時、あるいは一日二日、あるいは一年二年、あるいは七年

じゆうにねん

にせんよねん いご ずい

十二年か。いかんが二千余年已後の瑞あるべきや。

こた

い

しゆう

しょうおう

ずい

いつせんじゅうごねん

はじ

合

答えて云わく、周の昭王の瑞は一千十五年に始めてあ

きりきおう

ゆめ

にまんにせんねん

はじ

えり。訖利季王の夢は二万二千年に始めてあいぬ。あに

にせんよねん

さき

現

うたが

二千余年のことに前にあらわるるを疑うべきや。

と

い

ざいせ

めつご

ずいだい

問うて云わく、在世よりも滅後の瑞大なる、いかん。

こた

い

だいち

どう

ひと

ろっこん

うご

答えて云わく、大地の動ずることは人の六根の動くによ

ひと

ろっこん

うご

だいしよう

だいち

ろくしゅ

こうげ

る。人の六根の動きの大小によって大地の六種も高下あり。

にぜん

きようぎよう

いつさいしゅじよう

ぼんのう

破

爾前の経々には、一切衆生、煩惱をやぶるようなれども、

まこと

いま

ほけきよう

がんぼん

むみよう

実にはやぶらず。今、法華経は、元品の無明をやぶるゆえ

だいどう

まつだい

ざいせ

あくにん たた

に大動あり。末代はまた在世よりも悪人多々なり。かるが

ざいせ

ずい

勝

由

じげん

たも

ゆえに、在世の瑞にもすぐれてあるべきよしを示現し給う。

うたが

い

しようもん

疑つて云わく、証文いかん。

こた

い

きよう

によらい

げん

いま

答えて云わく、「しかもこの経は、如来の現に在すすら

おんしつおお

めつど

のち

とううんぬん

い

なお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」等云々。去ぬる

しょうか

ぶんえい

おおじしん

だいてんぺん

てんじんしちだい

ちじんごだい

正嘉・文永の大地震・大天変は、天神七代・地神五代はさ

にんのうくじゆうだいにせんよねん

あいだ

にほんこく

ておきぬ、人王九十代二千余年が間、日本国にいまだなき

てんぺんちよう

ひと

よろこ

たた

てん

きちずい

天変地天なり。人の悦び多々なれば、天に吉瑞をあらわし、

ち

たいしやく

どう

ひと

あくしんさか

てん

きようへん

ち

地に帝釈の動あり。人の悪心盛んなれば、天に凶変、地に

きようようしゅつたい

しんに

だいしよう

したが

てんぺん

だいしよう

凶天出来す。瞋恚の大小に随つて天変の大小あり。

ちよう

いま

にほんこく

かみいちにん

しもばんみん

地天もまたかくのごとし。今、日本国、上一人より下万民に

だいあくしん

しゅじようじゅうまん

あくしん

こんぽん

いたるまで、大悪心の衆生充滿せり。この悪心の根本は、

にちれん

お

日蓮によりて起これるところなり。

しゅごこつかいきよう

もう

きよう

ほつけいご

きよう

あじやせおう

守護国界経と申す経あり。法華以後の経なり。阿闍世王、

ほとけ

参

い

わくに

だいかんぼつ

おおかぜ

たいすい

ききん

仏にまいりて云わく「我が国に大旱魃・大風・大水・飢饉・

えきびよう

ねんねん

お

うえ

たこく

わくに

攻

疫病、年々に起こる上、他国より我が国をせむ。しかるに、

ほとけ

しゅつげん

たま

くに

と

そつら

仏の出現し給える国なり、いかん」と問いまいらせ候い

ほとけこた

のたま

よ

よ

だいおうよ

しかば、仏答えて云わく「善きかな、善きかな。大王能く

この問いをなせり。と なんじ おお ぎやくざい なか ちち 汝には多くの逆罪あり。その中に、父

を殺し、提婆を師として我を害せしむ。ころ だいば し われ がい にざいおお ゆえ この二罪大いなる故、

かかる大難来ること、かくのごとく無量なり。だいなんきた むりよう なか わ その中に、我

が滅後に末法に入つて提婆がようなる僧、国中に充滿せ

ば、正法の僧一人あるべし。しょうほう そういちにん か あくそうとう しょうほう ひと 彼の悪僧等、正法の人を

流罪・死罪に行つて、王の后乃至万民の女を犯して謗法者

の種子国に充滿せば、国中に種々の大難おこり、後には

他国にせめらるべし」たこく 攻 説 そうろう いま よ ねんぶつしゃ ととかれて候。今の世の念仏者か

くのごとく候上、真言師等が大慢、提婆達多に

ひやくせんまんおくばい

そうろう

百千万億倍すぎて候。

しんごんしゅう

ふしぎ

粗

々

もう

たいぞうかい

はちよう

くそん

真言宗の不思議あらあら申すべし。

胎藏界の八葉の九尊

え

うえ

登

しよぶつ

おんかお

踏

を画にかきて、その上にのぼりて、諸仏の御面をふみて

かんじよう

もう

おこな

ふぼ

かお

てんし

いただき

灌頂と申すことを行ふなり。父母の面をふみ、天子の頂

もの

こくちゅう

じゅうまん

じようげ

し

をふむがごとくなる者、国中に充滿して、上下の師とな

くに 亡

れり。いかでか国ほろびざるべき。

よ

いちだいじ

ほうもん

もう

このこと、余が一大事の法門なり。またまた申すべし。

先

書

そうろう

甚

ひと

仰

さきにすこしかきて候。いとう人におおせあるべからず。

便

こころ

いちどに ど

びんごとの心ざし、一度二度ならねば、いかにとも。